

## 沖縄の今と自己決定権

琉球新報編集局政治部長 新垣 毅

### ◆はじめに

私は 2 年前、東京に赴任するために部屋を探しに来たんですが、私が決めた部屋を翌日になって大家が、琉球新報の記者だから貸さないと言うんです。その後、私はこのことを記事にしたのですが、そうしたらネット上でいろいろ攻撃を受けました。私のことを反日テロリストとレッテルを貼った上で、テロリストにアジトを貸さなかった大家は英断だといった内容です。しかし、良く見てみると沖縄の人々（うちなんちゅう）を攻撃しているのではなくて、米軍基地に批判的な論調を張っている新聞に対してヘイト的なことを浴びせていました。そして日米同盟こそが国益であって、これを損ねる批判的なことを言うやつらは、国賊、反日というパターンがあることが分かりました。恐らく、原発に反対する人々、国策で犠牲になっている地域、あるいはマイノリティーの人たちが声を上げると、すぐに反日とか言って襲い掛かってくる今日の状況は、とても残念なことであると思います。

でも、だからこそ、一体何が起きているのか正面から向き合わない限り、恐らく沖縄の問題、そして神奈川の基地問題も解決されないまま、思考停止に陥ってしまい、非常に危険な状況になってしまいます。まずは問題の本質を押さえることが大事だと思っています。

### ◆沖縄の米軍基地の機能強化

沖縄の基地問題では政府も基地の返還、負担軽減に取り組むとずっと言っています。しかし、政府の負担軽減策の実態は、基地のリニューアル・再開発です。「負担軽減」の条件の一つは、その代替施設を沖縄県内に造ること、もう一つは、それが最新鋭の兵器に対応する新しい施設です。そうすると、基地は 100 年、200 年の耐用年数がありますから、半永久的に沖縄は基地の島にされてしまう。そうした機能強化は許されませんと言っているのが沖縄の人たちの叫びであります。

例えば、普天間飛行場の辺野古への移設において、新しい機能が二つ付きます。一つは、普天間には軍港ありませんが、辺野古では最新鋭の強襲揚陸艦が着岸できる軍港が整備されようとしています。もう一つは、新たに弾薬庫を造ることになっています。今年の 9 月に NHK が『沖縄と核』というドキュメンタリーを放映しました。沖縄は、日本に復帰する 1972 年以前に、最高時 1,300 発もの核ミサイル弾頭を貯蔵し、発射できる世界最大級の核攻撃基地となっていたというショッキングな話です。辺野古に新たな弾薬庫を造る理由は、いざとなったら核を配備するという意思の

表れではないかとも言われています。

さらに、辺野古の新しい軍港は原子力潜水艦が着岸できるかもしれません。北朝鮮の核戦争への対応として日米が進めている

のが、潜水艦による核ミサイル攻撃です。神奈川も他人事ではありません。米海軍第 7 艦隊の母港、横須賀基地がありますが、ここは国内で一番軍事機能を有しているといわれています。私は、北朝鮮がまず狙うとすれば、この横須賀基地と沖縄の嘉手納基地だと考えています。



### ◆わいせつ事件はくり返される

沖縄の米軍基地というのは、大半が海兵隊の基地です。海兵隊はアメリカ本国でも荒くれ者と呼ばれ、比較的若い貧困層、あるいは有色人種、本国にいたら失業とか犯罪の温床になるような人たちがリクルートされているといわれています。実際、今までアフガン戦争とかイラク戦争などでは、沖縄が出撃基地になって海兵隊が行っています。心的外傷後ストレス障害 (PTSD) になって戻ってきた半ノイローゼ気味の兵士たちが、また明日、出兵し死ぬかもしれないというときに、沖縄の女性たちにわいせつ行為をするというようなことが繰り返されています。

60 年以上、米兵絡みのわいせつ事件は基地がある周辺ではなく、沖縄で一番人口の多い那覇など、市街地で起きています。つまり、わざわざ人がいる所に行って、事件を起こしているのです。結局、抜本的に基地を減らすか兵力を減らさない限り、こうした事件はなくならないということです。さっき申し上げました沖縄県内に代替施設を造るという、政府による条件が続く限り、沖縄が半永久的に基地の島になる、半永久的に事件も繰り返されると言えます。

### ◆沖縄戦の体験を今も米軍基地が思い起こさせる

沖縄の負担は、こうした日常的な基地のストレスや、人権侵害だけでは語れない面があります。それが、第二次大戦末期の沖縄戦の歴史的経験です。国内で唯一、住民を巻き込んだ大規模な戦闘が行われたといわれています。もちろん本土でも爆撃があって、民間の人たちがたくさん犠牲になりましたし、広島、長崎には原

爆が落とされました。そうした被害がありますけれども、沖縄戦の特徴は、住民が戦闘に参加したことです。巻き込まれたというだけではなくて、自分たちも竹やりを持って、マシンガンを持っている米兵たちに立ち向かっていったということです。

また、米軍が上陸する前に日本軍が陣地を築くわけですが、間に合わないで住民を根こそぎ巻き込んで、作業をさせました。すると、住民たちは基地の秘密を知ることになります。理解できない琉球諸語を話すので不審となります。そして、もし彼らが捕虜になったら秘密がばれるかもしれない。こうして捕虜になったら辱めを受けるくらいだったら死になさいという教育を徹底します。

いよいよ劣勢になっていくと、住民が隠れていた壕からも住民を日本兵が追い出して、食料を奪ったり、自分たちが隠れたり、泣いている赤ちゃんを殺す。それを止める母親に対して、止めるんだったら自分で殺しなさいと言って、母親が自分の子どもを殺す、あるいは銃弾の雨の中に赤ちゃんを抱えて出ていく。集団自決だけではなくて、このような住民虐殺も起きています。こうした経験から沖縄の人たちが学んだ教訓は、軍隊は住民を守らないどころか、殺しさえするということでした。

沖縄戦の記憶というのは、沖縄の人にとっては、戦争体験者だけではなく、その子どもや私みたいな孫の世代も、どこか心象的につながっている部分があります。大きな沖縄のお墓をご覧になった方もいるかと思いますが、そこに、半ばピクニックのように親戚がたくさん集まって、先祖に手を合わせるということを毎年しています。そのときに、子どもながらに、先祖はどうやって生きたのか。またどうやって死んでいったのかが気になるから、おじいやおばあに聞くわけですけども、戦争の局面になると急に話をしなくなります。その時の表情を見て育っていますので、戦争の恐怖みたいなものは身近に感じるところがあります。

こうした沖縄に、大量の米軍基地があるということはどういうことか。朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争、アフガン戦争、湾岸戦争等で、沖縄が出撃基地になってきたわけです。そうすると、戦争と隣り合わせの生活をせざるを得ない。場合によっては、相手から狙われる。あるいは、攻撃を受けている人々から、沖縄は悪魔の島だと名指しされる。沖縄戦で非常に辛い体験をした住民にとって、これほど苦しいことはありません。戦争で傷ついた心の傷、トラウマに刺さるナイフのように米軍基地が存在するのです。沖縄戦を忘れたくても忘れさせてくれない。それが沖縄における米軍基地です。

それでも、北朝鮮や中国が怖いから米軍に守ってもらえないでしょ、沖縄の基地は必要なんだと言う人たちがたくさんいます。そして現政権の沖縄の基地政策、あるいは安全保障政策を支持しています。でも、

本当にアメリカは守ってくれるのでしょうか。

#### ◆日本政府が沖縄に米軍基地を置きたい訳

沖縄の米軍基地のほとんどは海兵隊です。面積でいうと4分の3、兵力は6割ぐらいが海兵隊です。いざという時、最初に敵地に入り込んで、敵を掃討するという殴り込み部隊としての役割を担っています。ところが湾岸戦争はどうでしょう。まず夜中にゲーム感覚で空爆を行います。相手をほぼ壊滅状態にした後に海兵隊なり、陸軍なりが入って行って、生き残った敵を掃討していくという形態に変わっています。

これは、イスラム国やテロ組織が相手でも同じです。そして、今はどうでしょう。ご存じのように、ミサイル戦争の時代です。だから、北朝鮮のミサイル開発に、みんな神経を尖らせているわけです。もちろん、中国も核兵器をいっぱい持っていて、沖縄米軍基地にミサイルが向いています。沖縄本島に集中している米軍は、2発ぐらいで壊滅してしまうということで、実はアメリカのシンクタンクが、もっと沖縄の基地をハワイとかグアム、オーストラリアなどに分散させるべきだと言っています。実際アメリカは、日本政府に何度も、沖縄の海兵隊は、海外に撤退してもいいですよという打診をしています。ところが、これを断っているのが日本政府です。

今の海兵隊の役割の一つは災害時などの人道支援です。より戦争に近いものでいうと、テロの特殊作戦ですが、そうしたことに何万人という兵士が沖縄に必要ですかということがあります。

そして、日本政府が引き止める理由の一つは、海兵隊を人質として考えていることがあります。もし尖閣諸島で中国と何か問題があったとします。そのときは、まず自衛隊が戦うことになっています。宮古、八重山がある先島諸島で戦って、限定的に終わらせることを想定しています。その後、必要だったら沖縄の米軍兵士が戦うのですが、そのとき、日本政府が思っているのは、アメリカの兵士に血を流させるということです。アメリカ国民というのは、自国民の血が流れることに非常に敏感な国民性を持っています。パールハーバーしかり、9・11 テロしかりです。でも、アメリカ国民は、実は非常に兵士が血を流すことも嫌がります。ですから、今、アメリカが一生懸命やっている開発は、ドローンによる攻撃や核を持つことによる抑止などです。ですから海兵隊は非常に時代遅れでして、アメリカも兵士を送り込むような戦争はやりたくない。しかし、日本政府は憲法9条もあるし、シリビアン・コントロールとか、いろいろな問題がある中で、自衛隊だけで中国との戦争なんかできっこないと。やっぱりアメリカさんに参戦してもらわないと守れないというふうに考えているわけです。ですから、人質として米軍を沖縄に置いておくということです。

日本国民全体がいうように沖縄の米軍基地が日本を



守ってくれるかもしれませんが。でも、それは間接的です。直接守ってくれる部隊ではありません。要するに、アメリカが参戦しないことには意味がないというような形態を取っているということです。

また、アメリカは中国に対して、私たちは領土問題に介入しませんと言っています。実はアメリカは、中国軍と制服組の間で合同演習もやっていますし、年に何回も定期的な制服組同士の会合も開かれています。だから、南沙諸島問題で緊張が走っても大丈夫なシステムができあがっているんです。そもそも尖閣を巡ってアメリカが中国と戦争する動機がないということです。

しかしながらネット上では、中国は怖い、沖縄を取りにくるとか、冗談にもならないデマがどんどん流れています。確かに、北朝鮮はどのような行動に出るか分からないので、脅威はあると思います。でも、もしいったん核を使った戦争が始まったら、間違いなく第3次世界大戦になります。これをやるメリットは、恐らく米朝、あるいは中国もほとんどありません。アメリカは、むしろ今、中東に非常に力を注ぎ始めていますので、東アジアはさっさと片付けたいと思っています。なぜ中東にずっと力を入れているかというと、簡単です。オイルがあるからです。ところが、北朝鮮にはそうした魅力あるものはあまりありません。

#### ◆沖縄の自己決定権

これまでお話ししました沖縄の非常に厳しい状況をどう乗り越えていくか考えたときに、キーワードとして出ているのが、「自己決定権」です。これは国際法の国際人権規約というもので定められています。人権の中でも最も尊い権利だといわれています。これは集団の権利で、ある集団の人々の将来的な重要な事項は、自分たちで決める権利があるという条文になっています。この集団の自己決定権が侵害されると、その集団を構成する個人の人権が損なわれる可能性が極めて高いと考えられています。沖縄の場合、基地を整理縮小、あるいは撤去してほしいという自己決定権がきちんと順守されない。そうした状態があるので、女性がレイプされる事件が繰り返される、個人の人権が侵害されたと例えることができます。

政府はいつも米軍基地問題、安全保障問題は、政府の特権事項だから自治体は黙っておれというような姿勢をずっと繰り返しています。大田知事や、翁長知事が裁判闘争しても、裁判所も憲法より日米安保条約のほうが上のような判断をします。これまで司法審査の対象から除外すべきとする統治行為論によって沖縄の訴えは避けられています。そうすると、何のために沖縄は日本に復帰したんだろうという思いになるわけです。

こうした政府の専権事項という理由立てを打ち破るために、国際法の考え方を持ち出して、それを国際的に、あるいは日本本土にPRすることによって、今の沖縄の基地問題を安全保障問題ではなく、人権問題として

きちんと捉えてほしいという訴えになります。2年前、翁長知事は、沖縄県の知事として初めて国連に行って、国連人権理事会の場所で、沖縄の自己決定権と人権が侵害されているということをお話ししました。

では、こうした自己決定権を主張して、ゆくゆく沖縄はどういう役割を果たしていきたいかということがあります。

#### ◆東アジア共同体構想と沖縄の役割

軍事によって戦争を抑止しようという発想になると、軍拡競争が始まります。北朝鮮がミサイル開発をするほど、日本も最新鋭の兵器を次々購入する。そうではなくて、紛争になりそうな火種、例えば竹島や尖閣といった領土問題、あるいは従軍慰安婦問題や靖国参拝といった歴史教科書、歴史認識問題などをテーブルの上で解決するために、東アジア地域包括的経済連携(RCEP)や東アジア共同体という枠組みでやっという発想が以前からあります。沖縄県としても尖閣問題を抱えているし、琉球王国時代にかなり中国や朝鮮半島と交易して、文化を深めた歴史もあります。こうした東アジアのEU的なものをつくる中で、沖縄が対話のなかで役割を果たしていけば、沖縄の米軍基地の必要性はなくなっていくと思います。

翁長さんも沖縄は平和の緩衝地帯であるべきだと言っていて、東アジア経済戦略構想というものを打ち出しています。こうした枠組みの中で大局的に見ることによって、今、日本という国が足りない部分を認識し、ビジョンを描くことが非常に大事だと思います。

というのも、例えばヘイトスピーチというのは、非常に内向きな思考から出ています。自分たちの職場や仕事を外国人、在日コリアンが奪うのではないかとという発想でヘイトが始まるわけです。超高齢化社会が始まり人材が不足しているので、外国人の労働力にも頼らざるを得ない。要するに共生しないといけなわけです。そうした人々を排斥することが、一体自分たちの将来に何の役に立つというのか。むしろヘイトスピーチは、自分や子や孫の将来を足蹴にするような行為なんだということに気付いていかないといけないと思っています。

軍事費を増やしていくというような状況をつくるのではなく、生活のほうにお金を回せるようにしていかないと、恐らくこの日本というのは将来、駄目になるんじゃないでしょうか。こうした大きなビジョンを描けないと、恐らくヘイトスピーチの問題や日本の世界に置かれている位置が見えづらいのではないかなと思います。

沖縄にいて、それがよく見えてくるというところがあります。いろんな矛盾が集中しているからです。ぜひ沖縄を通して、今の東アジア、あるいは世界の状況というものを感じ取り、考える機会にいただければと思います。

(あらかき つよし)